2010年1月20日発行　発行：学校法人国際医療福祉大学　☎0287-24-3000　ホームページアドレス：http://www.iuhw.ac.jp/

「共に生きる社会」の実現をめざして

IUHW

International University of Health and Welfare

vol. 80
January 2010

新春対談

国際医療福祉大学理事長　高木邦格
国際医療福祉大学大学院教授　黒岩祐治

新春のごあいさつ

国際医療福祉大学学長　北島政樹
国際医療福祉大学大学院院長　開原成允

IUHW International University of Health and Welfare vol.80 January 2010

C O N T E N T S

2 新春対談
国際医療福祉大学理事長　高木邦格
国際医療福祉大学大学院教授　黒岩祐治

5 新春のごあいさつ
国際医療福祉大学学長　北島政樹
国際医療福祉大学大学院院長　開原成允

6 卒業研究発表会・大学院研究報告会

9 学生＆企業　研究発表会

10 学術交流協定

11 日中リハビリテーションシンポジウム

12 小田原キャンパスレポート 第13回

13 福岡天神キャンパスレポート 第3回

14 大川キャンパスレポート 第18回

15 Topics & Columns
留学生・市長懇談会／保護者懇談会／同窓会／看護学科「老年看護学」の展望／言語聴覚学科「実習報告会」／視機能療法学科「ロービジョン講習会」／新カルテ教室／総合教育センター語学教育部「スピーチコンテスト」／〈コラム〉私のおすすめ本 第14回「娘よ、ゆっくり大きくなりなさい―ミトコンドリア病の子と生きる」（小田原保健医療学部作業療法学科　講師　阿部浩美）／日韓創薬育薬医療ネットワークのあり方を検討する　-韓国研修を終えて -（創薬育薬医療分野博士課程三年　福島　芳子）／〈コラム〉私の主張 第14回（理学療法学科　講師　下井俊典）

19 学生ページ「我がふるさとのお正月」（北海道「くじら汁」、山形県「雑煮」、宮城県「雑煮・煮つけ」、栃木県「おせち・お雑煮」、岩手県「みずき団子」、福島県「夫婦獅子舞祭」、千葉県「初日の出」）

20 医療福祉チャンネル774／学位記授与式・入学式のご案内

新春対談 二〇一〇

国際医療福祉大学理事長 高木邦格 × 国際医療福祉大学大学院教授 黒岩祐治

黒岩教授（以下敬称略）　あけましておめでとうございます。黒岩祐治です。

今日は国際医療福祉大学の高木邦格理事長に二〇一〇年の抱負を語っていただきたいと思います。

まずは、今年はどのような年になりそうですか？

高木理事長（以下敬称略）　今年は医療費の改定もありますので、医療福祉分野にとって、明るい年であるように祈っています。しかし、どうなるか、とても難しい年になるような気もしています。

黒岩　そうですね。だからこそ力を発揮していこう、という年でもあるのですね。

振り返ると、二〇〇九年はいろいろなことがありました。政権交代もありました。私自身もフジテレビを辞めて、このグループの一員となりました。大きなチェンジがあったすごい年でしたね。福岡山王病院ができ、山王メディカルセンターもできました。

高木　いろいろありましたが、明治四三年に祖父が開設した福岡県大川市にある高木眼科医院が、ちょうど百周年になりました。その百周年という記念すべき年にいろいろな施設が竣工したということで、これも縁かと思っています。

黒岩　今年の展望として、まず、国際交流はどのような展開になりそうですか？

高木　「国際交流を通じて学生のみなさんに教育的な良い影響を与えたい」という思いでこれまで中国・ベトナム・タイ・オーストラリア・アメリカなど、さまざまな国と交流を行ってきました。

特に中国においては、中国身体障害者連合会という大きな組織の中にある中国リハビリテーション研究センターと協力して二十数名の留学生を受け入れ、中国初の四年制のリハビリテーション大学を作る際には、本学の教員を延べ四一名派遣しました。その集大成として、昨年一二月一九日に福岡で行った「日中リハビリテーションシンポジウム」は大変な盛況で、新聞にも大きく掲載されました。

また、韓国においては、建陽（コニャン）大学校、仁濟（インジェ）大学校という二つの大学と学術交流協定を結びました。本学の福岡看護学部や福岡リハビリテーション学部のある福岡市はアジアに大きく開かれた都市であり、また二大学とも医療福祉分野に大きな実績があるため、交流を深めていきたいと思います。

学生の研修場所も、これまでの中国・ベトナム・オーストラリアに加え、ハワイ大学とも提携して、拡大することができました。

さきほどの「日中リハビリテーションシンポジウム」では、私も大変感動しましたが、学生のみなさんにとっても教育の効果がありましたし、リハビリテーション医学・医療分野の向上という意味においても有意義なものでした。こういう国際学会などもさらに強化していきたいと思っています。

黒岩　なるほど。こういう時代だからこそ、医学・福祉分野における国際交流というのは大事なんですね。

その中でどんなチャレンジをしていくのか、さらに伺っていきたいと思います。

大学院に医療経営戦略コースができますが、これはどのようなコースですか？

高木　国際医療福祉大学では、平成七年に医療経営に関する学科を日本で最初に創設しました。その際、多数の病院管理学会の経験者の皆さんにお集りいただきました。

平成七年当時は、医療費が三〇兆円を超えていて、医療従事者は約三五〇万人だったのですが、私は不思議に思っていたことがありました。当時大学にはホテル学科や観光学科などはあっても、医療経営を学べる学科がなかったのです。そこで本学が日本で最初に、医療経営を学べる学科を作りました。

その最終的な集大成であり、私たちの夢であるのがＭＢＡです。修士課程で医療経営における指導者的な人材を育成する。現在医療費は三四兆円を超えていますが、そういうものをマネジメントしていく。リスク管理の問題、経営上の問題、黒岩先生も医療福祉ジャーナリストをされていますが、そういったマスコミとの関わり合い、患者さま目線の医療など、いろいろなことをトータルに判断できる人材を育成したいと思っています。これは医療経営分野において、学部教育から修士課程に移っていく最終段階にきたのだと思っています。

黒岩　私も医療福祉ジャーナリズム分野の授業を担当していますが、そこで学べるものは何かといえば、例えば病院における危機管理があります。病院内で何か起きた時に、ジャーナリズムはどうやって攻めてくるのか、その手法を知った上でそれに対してどうやって病院組織を守っていくのか、こういうことも学んでいけるわけです。

医学の世界には、医者でもあり経営もできるという人はなかなかいませんが、そういう人をどんどん育てていけるコースができるというのは楽しみですね。

高木　そうですね。アメリカを見てみると、病院の院長というのは必ずしも医師でなくてもよく、賛否両論ありますが、ＭＢＡをとった人が院長になる場合もあります。一方日本では、幅広い物の見方ができて、医療経済・医療技術・職員の研修・教育・リスク管理などをトータル

にわかる人材がいません。これが問題で、そういうことがわかる人材を育てるというのが社会的使命の中でも重要なことだと思っています。

黒岩　そうですね。今までは、経営は素人だけど医者だからといって院長をやっていた、という人がたくさんいたということなんでしょうね。

高木　今は非常に厳しい時代で、世界一の低医療費の中でどうやってマネジメントしていくかというのは、本当に勉強が必要だと思います。

黒岩　そうすると、将来は病院経営もやってみたいというドクターが大学院に来てもいいわけですね。

高木　もちろんそうです。ドクターもいれば製薬業界の方、病院事務の方、看護師・理学療法士といったコメディカルの皆さんもそういう分野で学ぶことができます。

　海外に行って話を伺うと、必ずしも事務は事務ということではなく、例えば看護師が広報部長をやっている、理学療法士・作業療法士が建築部長をやっているということもある。そういういろいろな形がある時代になっていくのではないでしょうか。

黒岩　情緒障害児短期治療施設「那須こどもの家」が作られますが、これはどういう施設ですか？

高木　これは各県に必ずひとつ設けなければならない重要な施設なのですが、栃木県にはまだ設置されておらず、県からの強い要請を受けていました。

　議論もありましたが、大学敷地内にある国際医療福祉リハビリテーションセンターの下泉先生、この方は小児科の先生で栃木県の児童虐待ネットワークのトップもされている方なのですが、下泉先生や福祉分野・臨床心理の方々が日本で一番の理想的な施設を作りたいという熱意を語られ、また実際に栃木県でも児童の問題で困っている方々がいるということもあって、今年オープンをする予定となりました。

黒岩　国際医療福祉大学三田病院、これも完成が近づいていますね。

高木　そうですね。昨年起工式を行いましたが、この病院は北島先生が東京都認定がん診療病院の指定を得て、さらに国内でも有名な脊椎・脊髄センターがあります。院長には慶應大学医学部主任教授を定年前に辞められた小川先生が着任されました。小川先生は現職の日本循環器学会の理事長で、心臓の分野では大変な権威です。

　このようにがん、脊椎・脊髄センター、循環器などバランスのとれた病院であり、今後は延床面積も二倍になりますので、日本を代表する病院になるのではないかと思います。

黒岩　山王病院のようにアメニティも充実させるのですか？

高木　アメニティの充実というのは私どもの基本方針ではありますが、救急医療なども含め広範囲の方に利用していただける施設にしたいと思っています。

黒岩　先生方もすごい方がいるようですね。

高木　本当に幸せなことに日本的にも世界的にも有名な方々が集まり、研究もできて医療技術・臨床もできて、かつ人柄もいい方々に多数集まっていただき、幸せなことだと思います。

黒岩　北島学長が就任して、大学の薬学部ではさっそく先端漢方医薬学教育研究センターができましたが、こちらについてはいかがですか？

高木　北島先生は第一〇〇回日本外科学会会長、第四二回万国外科学会会長を務め、日本の外科分野の頂点ですが、そういう外科医の先生が漢方に興味を持たれている。黒岩先生のお父様も漢方を使ってがんが縮小したと伺っていますが、そういう漢方のメカニズムを研究していくということは、極めて重要なことです。高齢社会において、副作用とか体に優しく浸透していく作用とか、そういうものについてぜひ研究してほしいと思います。

黒岩　超高齢社会になって、西洋医学も素晴らしいけれど限界はある。それを漢方の力で補うというのはすごく大事なことです。その漢方にきちんと科学の目を向けていこう、これが一番大事なことで求められていることだと思います。

高木　漢方にも科学的に検証されているものと、稀ではありますが、悪化する例もゼロではないので、きちんとした研究をしていくことは、漢方にとって重要なことだと思います。

黒岩　大きな問題として医師不足の問題がありますが、グループとしてどのように取り組んでいきますか？

高木　国際医療福祉大学塩谷病院を栃木県の要請で継承しましたが、これも栃木県における医師不足によるものでした。

　私も医師免許を持っていますが、医師免許を持っていて、さらに実際臨床をやっている方々の統計がありません。看護師さんの場合は免許を持っている方の約四〇％が看護師の仕事をされていませんが、医師でありながら、管理的な仕事をしている方、海外にいる方、基礎医学をしている方がいたり、医師の労働時間の問題もあって、空前の医師不足の時代になるのだと思います。民主党のマニフェストに医師の養成数を一・五倍にするとありますが、最低限そのくらいの数は必要だと考えています。

　今後医師を増やすのであれば、アメリカやオーストラリア型のメディカルスクール、これは四年制大学を出た方がさらに四年後に医師となるものですが、そういうものも併存してもいいのではないでしょうか。高校時代に成績が優秀だから医師になる、親が医者だから医者になるというのもいいのですが、大学の四年間で様々な勉強をしてリベラルアーツを経験した方を医師にする、というコースが併存してもいいのではないかと思います。

黒岩　政権も交代しましたが、新しい年にはどんなことを期待しますか？

高木　医療費改定、介護報酬改定、介護職の地位の向上というのも大きな問題ですし、世界一の低医療費、先進諸国では医師の数も一番少ない、ベッドあたりの看護師さんの数も少ないという問題もあります。

　こういった問題を政権で工夫されて、公約に書かれたことをできるだけ実現していただきたいと期待しています。

国際医療福祉大学学長
北島　政樹

　あけましておめでとうございます。

　私は昨年の7月1日より国際医療福祉大学の学長に就任させていただきました。まず私が思ったことは、この大学の特徴として、四キャンパス六学部一五学科という多くのキャンパス、多くの学科を持っていることです。そしてその各キャンパスの連携が必要と考え、その現状について把握をいたしました。そしてその共通の話題として、まずもっとも大事な問題のひとつである国家試験、この合格率をどのようにして高めていくかを考え、各学科共通の国家試験対策委員会を昨年作りました。今年はこの国家試験対策について、さらにみなさんとともに努力をしていきたいと考えております。

　それから大学の使命として文科省・厚労省の公的資金の獲得、これが非常に重要な問題でありますので、これも全学科を中心に多くの公的資金を集め、教育環境ならびに研究環境の改善に努めていく予定でございます。

　昨年は本学薬学部に日本で初めて、先端漢方医薬学教育研究センターを開設いたしました。これは、東洋薬学と西洋薬学の融合を目指したものであります。これによって薬学部の学生は両方の薬学を学び、成長することができます。

　また昨年は薬学部ならびに福岡リハビリテーション学部の一期生が卒業しましたが、今年は小田原保健医療学部の一期生も卒業する予定であります。

　今年私たちが考えていることとして、若いうちに医療福祉の技術を学んでいただこうと、キッズスクールの開設を考えております。同時に全国の高校生を対象に作文コンクールを実施したいと考えております。

　最後になりましたが、われわれ国際医療福祉大学の大きな特徴のひとつでもある「関連職種の連携」、これを今後も推進していくつもりでございます。関連職種の連携については、われわれの大学が目指す日本でもっとも素晴らしい日本型のチーム医療、これを推進していこうと考えておるわけでございます。これにはぜひ、若い学生さんたちが一緒に参加して、よりよいチーム医療、これを若い時から学び、将来の糧にしていただきたいと思います。

　在学生のみなさまには、将来、医療福祉のリーダーとして活躍するべく勉学に励み、そして人間形成していくことを願っています。

　そして受験生のみなさまには、今われわれが推進しているチーム医療に参加していただき、病める人々をともに助けていく、こういうことを期待しております。

　どうぞよろしくお願いいたします。

国際医療福祉大学大学院院長
開原　成允

　みなさま、あけましておめでとうございます。大学院長の開原です。

　平成二一年度は大学院にとっても様々なことがありました。まず薬科学研究科という新しい研究科を開設し、またナースプラクティショナーという新しい分野を開設しました。このナースプラクティショナーというのは、もっと医療の中で活躍できる看護師を養成したい、という考え方にしたがって、新しい看護師を養成する分野であり、現在もっとも注目されている分野です。ＮＨＫをはじめ多くのニュースにも取りあげられ、現在とても注目されています。

　また、臨床心理では初めての修了生が一六名、本学を巣立っていきました。本学の臨床心理は、医療の世界でも活躍できる臨床心理士を育てたいということで開いたコースですが、今後こうした人たちの活躍に、大いに期待しています。

　がんプロフェッショナル養成プランも二年目を迎え、平成二二年三月には初めての修了生がでます。すでに薬学・放射線の分野でも資格取得者が出ており、本学のがんプロフェッショナル養成プランはいろいろな養成プランの中でももっとも成功したものではないかと思っています。

　平成二二年度のことを少しお話しますと、新しく医療経営管理の分野に、医療経営の戦略コース、これは一種のＭＢＡのコースですが、それを開設する予定です。現在病院経営の分野は大変急を告げており、明日からでも役に立つ優れた高度な技術を持った病院管理者を必要としています。このコースでは実践的な病院管理者を育てるため、教育方法もケースメソッドなどを取り入れた新しい教育を考えています。

　以上のように大学院は順調に発展していますが、現在の在校生は六〇〇名を数えるまでになり、また過去に修了した大学院生は約一八〇〇名にのぼります。またキャンパスも熊本に新しいサテライトキャンパスを開いて、全部で八つのキャンパスとなりました。

　本学の大学院は、大学院の役割としての研究者養成と高度の職業人を養成するという二つの目的の中で、後者の方により重点を置きながら今後も世の中のニーズに応えていきたいと思っています。

　昨年の暮れに同窓会がありましたが、本学の多くの同窓生も各分野で活躍をしています。そういう方々にとっても生涯教育を提供する母校でありたいと思っています。

　どうぞ本年もみなさまよろしくご支援のほどお願い申し上げます。

研究発表会

理学療法学科
視機能療法学科
言語聴覚学科
放射線・情報科学科
大学院
学生・企業

理学療法学科　助教
倉本アフジャ　亜美

「一生勉強！」の第一歩として

十一月十一日理学療法学科第十二期生による卒業研究発表会が開催された。今年度もそれぞれが総合臨床実習をこなしながら仲間とともにまとめ上げた力作が揃い、その数たるや口頭発表及びポスター発表それぞれ十四題ずつとなった。

研究分野に関しても運動学から運動力学、生理学や神経生理学、さらには評価やバランス、スポーツ、トレーニング、生活環境と幅広く、丸山学科長の講評通り、質的にも高い研究内容であった。

毎年同じような光景が繰り広げられるのであるが、今年度は例年にも増して質疑応答時に質問に立つ学生が多く、口頭発表にしろ、ポスター発表にしろ、質疑応答の時間が足りない場面が多かった。

卒業を約四カ月後に控えた十二期生が、約三百人の聴衆を前に自分の意見を堂々と述べ、真剣に質問をする姿を目にし、たった三年前ではあるが、筋肉や骨の名前をただただ必死に暗記しようと悪戦苦闘していたあの頃との異なり様に、感慨深い思いであった。

卒業研究や研究発表会を通して得られたであろう、研究への協力者に対する感謝の気持ちや研究結果に責任を持つこと、また常に疑問を持ち続けるという経験は、卒業後さまざまな人とかかわっていくことになる理学療法士の日常に一歩踏み込み、その道を歩き続けていくために非常に意義あるものとなるだろう。

理学療法学科　**森　奈央さん**

私は、卒業研究を通して、地域の転倒予防教室や通所施設を訪問させていただき、地域在住の高齢者の方々と接する機会を得ることができました。長い時間ではなかったのですが、どの方も協力的でとても優しくしていただき、卒研ということも忘れそうになりそうなぐらいに楽しい時間を過ごせました。今後も感謝の気持ちを忘れずに経験を臨床に生かしていければと思います。

理学療法学科　**武田　敦至さん**

私はデジタルカメラ二台を用いた三次元解析の有用性に関する研究を行いました。研究を行う中で、様々な問題に直面しました。その問題について研究班で議論したことや、人前で発言するという経験が私を成長させてくれました。そのことからも、充実した卒業研究になったといえます。この経験を今後の糧とし、活かしていきたいと考えています。

視機能療法学科　教授　**小原　喜隆**

第五期生が担当した研究報告会が十二月十二日と十九日に行われた。今年度はインフルエンザの罹患者がグループ単位で存在したため二日間の報告会となった。七研究班から十件の研究課題が報告された。いずれも興味深い研究テーマを各人が真剣に考え、研究を実行し自分たちの力で課題を征服して発表に至った。各々のテーマに見られた質問にも堂々と対応していた。研究結果については必ずしも満足しないかもしれないが、今後の成長の糧となるものと確信する。研究報告会の順番にとらわれず内容によって紹介してみる。

視機能と屈折異常は互いに影響するので研究テーマが最も多く報告された。屈折異常との関連は「近視眼の視機能」「強度近視におけるVERISの振幅低下と網膜菲薄化」「phoria adaptationのプリズム度数による変化」「乱視とランドルト環の切れ目の方向」「診療時間帯における眼の日内変動」などが報告された。近視の危険因子を追及したところ中心窩の厚さが近視の発生に関係する成績が得られ注目された。VERISの多用性は周知であるが測定結果の再現性などから今後、研究の発展が期待される。屈折と関係しないテーマとして「周囲の照度が視覚に及ぼす影響」「Effect of Alcohol on vision」「網膜像のぼけと両眼視機能の関係」「携帯電話使用時の有効視野」「Eye-Hand-Head coordinationと眼優位性の検討」といずれも大変興味ある内容であったので質疑応答も活発であった。五期生の学生さん、大きなそして貴重な経験を大切に成長して下さい。

「卒業研究報告会」

言語聴覚学科　教授　**城間将江**

言語聴覚学科の卒業研究報告会が十月二十九日に行われた。やや早期の感もあるや知れない。しかし、言語聴覚学科の卒業研究は、三年次の後期から四年にかけて履修する選択科目であり、三年次の後期期末テストの終了直後から情報収集や実験を行い、四年次の夏休み前後に論文の形式に整える。その後は推敲を重ね、卒業論文は原稿用紙の三十枚から四十枚にまとめる。結構な分量であるが、今年度は五十六名の学生が最終審査まで進むことができた。

言語聴覚学科では、まず、教員による口答審査がある。この審査終了数日後に、学生達は三年生に対して卒業研究報告会を開く慣わしになっていて、写真はその時に撮影したものである。学内及び学外における臨床実習やら国家試験勉強、更には就職活動なども並行して進めなくてはならないなかで達成したからなのか、学生達の顔がまるで卒業式を迎えるような輝きで誠に美しい。

卒業研究は、自分の頭で物事の本質を学問的に見極める方法を学習する第一歩に過ぎない。しかし、この経験は、専門家として臨床の知識や技術を深める上において生かされてくるのである。卒業研究なんかで難儀しなくていい、と学習の機会を自ら放棄する学生もいる中で、卒業研究報告会まで頑張り続けた学生達は、知らないことを解決していく過程や、考え続けることの楽しみを味わったのではないかと思う。

放射線・情報科学科　講師　**小池　貴久**

十一月七日に放射線・情報科学科の卒業研究発表会が行われた。口頭発表部門、ポスター発表部門に分かれて行われた発表会は今年で四年目を向かえ、各卒業研究担当教員の指導の下、学生が自ら問題を見付け、自ら研究して考え、自らまとめた成果を発表する場として熱気に包まれた盛況な会となった。

卒業研究はテーマ決定から研究計画の立案・実行、論文のまとめなど、研究のプロセスを経験し、研究の基本を体得することを目的とするものである。今回の研究発表は、口頭発表十三演題、ポスター発表七十五演題にものぼり、どの発表も学生のこれまでの努力と苦労の重みが伝わってくる内容で、一般の学会等で目にする内容にも引けをとらない立派なものであった。また、質疑応答では自分の考えをしっかりと伝え、活発な議論がなされていた。

口頭発表会場の様子

質問に答える発表者

発表会の運営は学生自らが実行委員会を立ち上げ、各研究グループからの代表者を中心にして、発表会の準備、会場の設営、そして発表会での司会、座長も行い、全てを学生自らが手がけた。苦労もあったことと思うが、多くのことを体得できた有意義な経験であったと感じている。今回の発表会で経験したことを卒業後、学会や研究会などの場でのプレゼンテーションにも生かしてくれることを期待したい。

優秀発表賞受賞者

口頭発表賞
本郷由佳、阿部晃大・廣瀬友香（共同発表）

ポスター発表賞
大場誠、石崎充大・澤進冴（共同発表）、坂田裕実子、坂本和翔、澤村知恵、林千恵
―松本惇美（共同発表）、

自分の興味をもった分野について時間をかけて研究することは初めてのことで、一から調べ自身の計画に基づいて道筋を立て

研究を行えたことは非常に良い勉強になった。また、何故かを考え、その原因を探る事の大切さ、多くの議論を重ねる事の重要さに改めて気付いた。本研究を通して先生方の熱心なご指導やお世話になった方々に感謝の意を伝えたい。

口頭発表賞　阿部 晃大さん（右）廣瀬 友香さん（左）

先生をはじめ、卒研に協力をしてくださった方々のおかげで研究をすることができ、感慨無量である。自分が興味を持った分野を試行錯誤しながら進めていった卒研は大変でもあり、楽しいものでもあった。この経験はこれからの自分にとって大きな力になると感じている。そして、今後も医療に貢献できるような研究をしていきたいと考えている。

口頭発表賞　本郷 由佳さん

平成二一年度　大学院医療福祉学研究科・D1／2研究報告会

大学院・福祉援助工学分野　田中　繁

一．大学院の組織について

博士課程の組織は、次のとおりである。

博士課程―医療福祉学研究科―保健医療学専攻

つまり、修士課程では三つの専攻科を持っているが、博士課程では一つの専攻科となり、より総合的に、より有機的に指導・研究を進めたいという大学の考え方が、反映している。

なお、現在大学院全体の学生数は六〇〇人であり、D1は五六名、D2は六二名である。

二．報告会の概要

日　時　十二月十三日　九時～十七時

会　場　大田原、東京、小田原、福岡天神、大川

発表数　大田原：一七　東京：七三　小田原：七　福岡：五　大川：三

三．大学院長よりの挨拶（写真）

発表会に先だって大学院長より、挨拶があった。開原大学院長は新政権発足に伴って大きな話題となった〝事業仕分け〟について触れた。記憶に新しいと思うが、事業仕分けでは多くの事業について、予算を削減すべきとし、その中には科学研究の基礎となるスーパーコンピュータの予算削減も含まれていた。このような結果になった一つの理由には担当者の〝仕分け人〟に対する説明のまずさがあったと言われている。これについて大学院長は、科学者（博士の学位取得を目指す者は科学者にならんとしている者と言える）は専門でない者に対しても自分の研究している内容について、分かりやすく的確に説明する能力を持つことの重要性を指摘したのである。医学、福祉、経営など、多くの異なる分野を一つの大学院で有し、一堂に会した発表会の場で扱うという特色ある我々の大学においては、学ばなければならない特に重要な能力の一つである。

四．発表の状況

まず、参加の状況であるが、午前中はおよそ各会場二〇名から二五名くらいが聴講していた。会場数は三つだったので、おおざっぱではあるが、七〇名～八〇名くらいは参加していたと考えられる。午後については、やや少なく、各会場一五名程度であった。

各発表は発表が七分、質疑応答が五分という配分であり、発表によってはかなりオーバーする例もあった。与えられた時間で発表する能力も重要である。

議論は比較的活発であったと感じた（写真）。D2については、実質的な残り時間は一年を切っているのであり、時間的に順調に進んでいると考えられる発表もあれば、不安を抱かせるような発表もあった。D1については二つのグループに分かれるように思う。それは、修士Mから研究を継続している者と、そうでない者である。新規に研究を始めた者は全体の研究計画がしっかりと出来ている者もいたが、これからと感じる者もいた。

私は、どちらかというと〝工学系〟の研究をしてきたので、〝質的研究〟というような内容については十分に理解出来ない点もあるが、全体を通して感じたことは、どんな分野の研究であっても、科学的研究である限りは、論理的な展開を重視してほしいということであった。学生の皆さんの奮起を期待する。

学生＆企業　研究発表会

一二月五日、宇都宮のとちぎ産業創造プラザにて、「大学コンソーシアムとちぎ」主催の「第六回学生＆企業研究発表会」が開催されました。

「大学コンソーシアムとちぎ」とは、栃木県内の大学、高等専門学校といった高等教育機関の連携や地域社会・産業界との連携・交流によりその活性化に貢献することを目的として設立されました。その中で栃木県内の企業と大学との連携をコーディネートする「産学官連携サテライトオフィス」が中心となり、年一回、学校、企業の研究発表会が開催されるのです。

今回は、本年度私が指導した学部生二演題、「足趾把持練習がバランスを向上させる効果の検討」（小室知貴、大井麻由佳、棚橋由佳、中山恵里佳、吉田翔一）

と「運動課題の有無が短期記憶に与える影響」（渡辺幸久、岩田英子、反町清貴、田名網香織、長久保貴義、山本明日香）を口頭発表の部にエントリーしました。

午前中はポスターセッションです。ポスターセッションでは、同じ理学療法学科の金子班、斎藤静が発表しています。午後は口頭発表の部。二演題とも、第三会場の医学・医療福祉系のセッションで発表です。

数人の審査員から、発表後に質疑応答があります。医療、福祉分野以外の方が審査員になっているので、どういう質問がくるかかなり緊張しましたが、審査員の方に興味を持っていただいたようで、

多くの質問をいただきました。

審査の結果、「足趾把持練習がバランスを向上させる効果の検討」が「栃木県経営者協会賞」を受賞。さらに副賞として図書券もいただきました。

一〇ヶ月前に自分たちが決めて、長期間取り組んできた研究が、単に自己満足ではなく、社会に貢献できるものなのかを改めて見直す機会になればいいと思います。

長期間の卒業研究の終了です。本当におめでとうございました、そして、おつかれさまでした。

（理学療法学科　講師　下井俊典）

この度「学生＆企業研究発表会」理工農系口頭発表部門にて、「陽子線治療用リッジフィルタのモンテカルロ法による設計」というテーマで応募し、昨年に引き続き賞を頂き光栄に思っております。

この会は他大学・分野と交流を持てる貴重な機会であり、私が参加した理工農系発表会では普段接することのない分野の研究を拝聴し刺激を受けました。

私は放射線療法の一つである陽子線治療の際に用いられるリッジフィルタの設計について発表しました。リッジフィルタはある程度幅を持った癌に線量が均等に当たるようにする器具で、それを従来とは違った形に設計しました。

今回、銀賞に認められたことを機に、今後さらなる研究に邁進していきたいと思います。ありがとうございました。

（大学院　保健医療学専攻　放射線・情報科学分野二年　河原藍）

私が指導担当した研究グループは「下肢の運動療法」をテーマにポスター発表と口述発表で研究成果を報告いたしました。研究の内容は基本動作に必要な下肢機能に対して、異なる運動課題を提示し、脳機能評価を用いて分析するものでありました。

今までの運動療法では、歩行練習または筋力増強において動作能力向上に必要な歩行能力や下肢機能が向上することが認められております。しかし、運動負荷によっては効果が期待できない場合もあります。たとえば、脳卒中で車椅子生活中心の対象者は、ベッド上で行える簡単で低負荷な運動課題でしか提供できないのがリハビリテーションの現状でありました。そこで今回、両下肢を用いた「両

下肢課題」や残存機能を有効に活用できる「片脚課題」を対象に脳機能評価を用いて分析を進めてみました。脳機能評価は近赤外線分光装置（NIRS,ETG-4000,HITACHI、JAPAN）を用いて実施いたしました。この測定機器は作業療法学科の谷口教授を中心に実験が進められており、理学療法学科でも活用させていただいております。

この研究を通じて、学生は脳機能のメカニズムや神経生理学的な機序を勉強する機会を得ることができ、直接学生自身の「目」で確認できない現象を分析することが可能となります。私も指導をしながら学ぶべきことも多く、今後の理学療法分野の発展に寄与できればと考えております。今回、第六回の学生&企業研究発表会において医療福祉ルネッサンス賞を受賞いたしました。本大学は医療福祉の総合大学であり、地域貢献に寄与できたものと思います。また、この受賞は学生自身の努力の成果だと考えております。この受賞をバネに今後の研鑽に向けてさらに前進していきたいと考えております。研究を進める上で、谷口教授をはじめご協力いただきました関係者に改めましてお礼申し上げます。

（理学療法学科　講師　金子純一朗）

学術交流協定調印式

韓国　建陽大学校・仁濟大学校

この度、国際医療福祉大学は、韓国の建陽（コニャン）大学校、仁濟（インジェ）大学校とそれぞれ学術交流協定を結び、調印式を行った。

建陽大学校は大田広域市にあり、医科・看護学科・PT学科・OT学科などの医療学科をはじめ、文科系や経営系など、四四学科を有する総合大学である。二〇〇七年度には大学総合評価優秀大学に選定されている。仁濟大学校は釜山市近郊にあり、医科・看護学科・PT学科・OT学科などの医療学科をはじめ、文科系・法学系・デザイン系など、七学部を有する総合大学である。

調印式は、一〇月二四日に建陽大学校、二六日に仁濟大学校で行われた。この学術交流協定は、それぞれの大学の相互協力に基づき、両大学間の国際的理解を深め、教育及び学術面での一層の発展を願うものである。

建陽大学校との調印式では、本学・高木邦格理事長と建陽大学校・金総長が調印を行った。その後の協定式では高木理事長が挨拶し、「これまで中国・ベトナム・タイ・オーストラリア・アメリカなどに学生を送ってきたが、今後は韓国との交流にも力を入れていきたい」と熱意を語った。仁濟大学校との調印式では、高木理事長と仁濟大学校・李総長が調印を行い、活発な交流を期待して固い握手を交した。

今回の学術交流協定が教員や学生の活発な交流を促進し、それぞれの大学に、より一層の発展をもたらすことを期待している。

「日中リハビリテーションシンポジウム」開催

一二月一九日（土）、日本と中国のリハビリテーション医療について話し合うシンポジウム「日中におけるリハビリテーション医療の現状と未来」（主催・国際医療福祉大学、後援・毎日新聞社など）が、福岡国際医療福祉学院ももち国際ホールで開催された。

冒頭、高木邦格理事長が挨拶し、「国際医療福祉大学は中国のリハビリテーション医療向上を大学のミッションとしており、人材養成に協力してきた。受け入れた二十数人の研修員は、中国で指導的役割を果たしている。このシンポジウムも中国のリハビリテーション向上に役立てば光栄である」と述べた。

第一部の講演では、まず、中国リハビリテーション研究センターの李建軍院長と劉恵林理学療法科主任が講演。一九八八年の設立、人材養成における本学やJICAとの取組み、さらには、現在進行中の衛星を使った遠隔教育の推進などが紹介された。障害者が八千万人を超える中国において、リハビリテーションに対する理解が深まり、リハビリテーション医療組織が整備されるなど、本プロジェクトがすでに大きな成果をもたらしていることを踏まえ、日本と中国とのさらなる協力を呼びかけた。

日本側からは国際協力機構（JICA）人間開発部の牛尾光宏技術審議役、国立障害者リハビリテーションセンターの赤居正美病院長、久留米大学医学部リハビリテーション部の志波直人教授、日本障害者スポーツ協会の陶山哲夫医学委員長（国際医療福祉大学大学院教授）がリハビリテーション医療における国際協力や日中協力について報告した。

第二部のシンポジウムでは、リハビリテーション医療の課題や今後の日中協力について意見交換が行われ、会場の参加者から「中国の伝統的な漢方や鍼灸はリハビリテーションにいかされているか？」「太極拳とリハビリテーションはつながっている気がするが、うまく組み合わせる方法は？」などの質問が出された。

このように、日中の専門家の話を直接聞くことができた今回のシンポジウムは、参加した医療専門家だけではなく、本学の学生にも大きな刺激を与え、かけがえのない教育的効果をもたらした。

李建軍氏「中国のリハビリテーション医療の現状と国際協力」

一九八八年に北京に中国で初めてのリハビリテーションセンターが設立された。人材養成に力を入れた第二期プロジェクトでは、国際医療福祉大学とJICAの皆さんに多大の協力をいただいた。

プロジェクトの成果は大きい。リハビリテーション医学は細分化され、現在は整形外科、神経科、腫瘍などに専門化している。同時にリハビリテーションに対する理解が深まり、科学的になった。

中国と日本が手を結び、世界のリハビリ発展に尽くしていきたいと改めて心に誓っている。

劉恵林氏「中国のリハビリテーション職種の養成の現状」

中国の身体障害者は八二九六万人、PT専門職は一万三千人いるが、現状では、PTの質も量も中国社会のニーズを満たしていない。今後はPT専門職を大幅に増やしていき、教育の内容にも力を入れ、資格認定の整備も図らなければならない。そのためにも海外の専門家の協力や支援をさらに要請したい。

中国リハビリテーション研究センターは中国で初めてPT診療科を作り、国際医療福祉大学・首都医科大学と協力して二〇〇二年から四年制大学の募集を始め、これまで一六〇人の専門職を育てた。

牛尾光宏氏「JICAのリハビリテーションにおける国際協力の現状」

JICAの障害者支援は、障害者の完全参加と平等を実現するため、障害者の自立を促すエンパワーメントと障害者の視点を開発援助に組み込むメインストリームという二つのアプローチを重視している。

赤居正美氏「リハビリテーション医療日中の協力」

日本では少子高齢化が最大の特徴。一人っ子政策をとった中国は日本以上に少子高齢化が進むので、今後の日中協力を考えた時、医療だけでは追いつかない現実に対して、どのような介護や福祉を織り込んだ制度をつくれるのか、その中で、リハビリテーションの果たす役割とは何か、などを考えるお手伝いができればと思う。

志波直人氏「日本リハビリテーション医学会における国際的な取り組み」

リハビリテーション医学会の国際化推進の大きなテーマは二つ。理事を複数にして国際体制の強化を図ることと四川大地震のような海外で起きた大災害のときに、蓄積されたノウハウを生かし支援できる体制を検討することだ。

海外のリハビリテーション医師との交流、特に中国との関係強化が重要であり、国際的なリハビリテーション医療発展のために活動を継続させていきたい。

陶山哲夫氏「アジアのパラリンピックの発展と課題」

障害者スポーツには、機能回復を図るリハビリテーションスポーツ、健康維持のためのレクリエーションスポーツ、そしてパラリンピックと言われる競技スポーツなどがある。

日本は人口大国の中国と手を携えて、アジアの障害スポーツやパラリンピックで国際貢献することが使命だと思う。

秋の市民公開講座

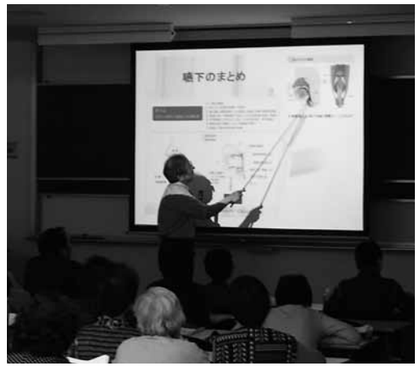
春に続き、小田原キャンパス恒例となった秋の市民公開講座が「家族と自分とみんなの健康を学ぶ―知識と技術を身につけよう―」というテーマで開催された。この講座は、十月二三日から十二月四日の毎週金曜日の夜に開講され、全七回で延べ四六〇名を超える市民が小田原キャンパスを訪れた。昨年度までは、学科ごとに八回全ての講座を担当してきたが、今年度からは、小田原保健医療学部内の全ての学科（看護学科、理学療法学科、作業療法学科）と医学一般教育が協同して企画した内容になっている。また、各学科の三年生・四年生が、市民の出迎えや受付、実技の介助を行うなど、積極的に参加することにより、学生間・教職員間との協働や、市民との関わり方を学んでもらう狙いもある。

今年度の講座は、講義だけでなく実技を取り入れたことが最大の変更点であり、特長となっている。まずは、各回のテーマに沿って、市民には講義を受けていただく。その後、講義の内容を踏まえたストレッチ、体操、気功、太極拳、ＩＱテスト、ハンドマッサージ、口腔ケアといった実技を体験していただく。講義と実技の二本立てにすることにより、知識だけではなく、技術も身につけていただき、今後の健康生活に役立てていただきたいという願いも込められている。

毎週講義終了後、市民には講座に関するアンケートにご協力をいただいた。講座については、「実技を取り入れることにより、講義だけの講座よりもわかりやすくなった」、「毎日の生活に役立ちそう」、市民と学生との関わりについても、「学生さんも一緒に指導してくれたので、心強かった」「挨拶と笑顔で、将来どんな医療専門職になるのか、今から楽しみ」といったお誉めのことばをいただいた。

これからも、地域の皆さまのニーズにマッチした市民公開講座を開催し、市民の健康づくりに寄与するとともに、本学と地域社会の交流を深めていきたい。

（総務課　高久 晃）



小田原養護学校実習生受け入れ

平成二一年度より、小田原キャンパスでは神奈川県立小田原養護学校の生徒さんの「現場実習」の受け入れを始めた。

小田原養護学校は、「知的障害教育部門」と「肢体不自由教育部門」があり、小学校から高等学校の年齢に該当する児童生徒が在籍。その中で、知的障害教育部門の高等部二、三年生の生徒さんが地域の事業所で現場実習を行うことにより、生徒さん自身の就労に関する意識を向上してもらうことが目的とされている。

小田原キャンパスでは平成二十年に小田原養護学校より実習生受け入れについての依頼を受け、地域交流委員会で受け入れ準備をし、今年度より受け入れを開始した。実習内容については、小田原養護学校の先生方と相談を重ね、生徒さんが将来希望する職種を考慮しつつ、実習をしていただくことになった。

今年度は、六月と十一月にそれぞれ二週間ずつ実習を実施した。六月に実習した生徒さんは、実習終了後も潮風祭にひょっこり遊びに来てくれ、教職員を驚かせた。また、この生徒さんからは、卒業後の就職も決まったとの知らせを聞き、関係者全員、大変喜ぶとともに、今後の活躍を期待しているところである。

このように、大学の社会貢献の一環として取り組んできた現場実習の受け入れは、彼等の社会復帰の一助となるとともに、大学側関係者にも大きな喜びを与えてくれている有意義な事業となっている。

（総務課　高久 晃）

コンクリートのビルに囲まれた福岡看護学部の殺風景な学内も花や緑が増え、クリスマスには飾り付けもして生活感あふれる温かさを感じる学部になってきた。

四月の入学式以来、運動会、前期試験、夏休み、大学祭と初めてのキャンパスライフは目まぐるしく過ぎて行き、学生はやっと落ち着いて学業に取り組む姿勢が見受けられるようになってきた。九ケ月の看護学の学びを通し、多少なりとも看護を目指す「志」が学生の「顔」にも見られるようになってきた。

十二月には血圧測定の実技試験が、年明けの一月には生活支援技術論（日常生活行動の援助技術）の実技試験があり、学生は空き時間を利用して練習に走り回っている。

父兄懇談会茶話会の様子

血圧測定の試験では、専任教員をはじめ、学生の家族、友人など三〇名の測定を終えてはじめて受験資格が与えられる。血圧計と聴診器とサインを貰う用紙を抱えた学生が、入れ替わり研究室を訪ねて来る。最初は測定のための説明もおぼつかず、おどおどした態度で、いきなり一八〇㎜Ｈｇまで加圧され、「痛い！」と叫んでしまったこともあったが、三〇名を終了する頃には落ち着いて患者役の教員や友人たちに対応し、正確に測定できるようになってきた。

生活支援技術の試験では、ベッドメイキング、全身清拭、洗髪、車いす移送などの技術について、友人を患者様に見立て、患者様の安全や安楽について検討しながらの練習を重ねている。

試験が終了すれば自分の技術に自信が持てるようになるのであろう。

このような実技試験の取り組みの中から学生は実習への「心と技と知」の準備を行っていくのだろう。

来春三月の臨床実習終了後、学生がどのように成長するのか楽しみである。

十二月五日には、保護者懇談会が開催され、多数の保護者の方に参加をいただいた。

教務委員、学生委員、実習委員担当教員からそれぞれ、試験や欠席など単位修得に関すること、喫煙や大学周辺の治安のこと、実習の重要性や実習施設に関することなどの報告がなされた。

そのあとは保護者の方と教員との茶話会や個人面談の時間があり、保護者の方同士、また保護者の方と教員とで、学生の学業や生活についての情報交換がなされた。

保護者の方は、親の知らない学校での子供の様子に驚かれたり、意外と大人であった子供の様子に喜ばれたり、日頃疑問に思っている事柄についての質問をなさったり、新しい学部でのキャンパスライフづくりの提案をして下さった。

教員も学生の家庭での様子や保護者の方の大学に対する希望や提案を知ることができ、これからの学生指導や新しい学部づくりのための示唆を得て、保護者の方との連携の必要性を感じた。

保護者の方、教員共々にとって有意義な時間となった。

福岡看護学部　青山和子

学生掲示板前のポインセチアア

福岡看護学部エントランスに向かう階段の植物たち

教員研究室階エレベーターホール

FD研修会開催

FD委員会の企画による研修会が一一月二一日（土）、福岡国際医療福祉学院・もも国際ホールで行われ、国際医療福祉大学福岡看護学部・福岡リハビリテーション学部及びグループ校の学校法人高木学園の三専門学校の教員六六名が参加しました。

満留昭久副学長の挨拶の後、小田正枝福岡看護学部長より「未来志向の学習方法としてのポートフォリオ」と題して講演が行われました。

講演では、「学生の学力低下」「ゆとり教育の弊害」が着目される昨今、学習上の目標設定、および目標へ向かうプロセスの産物を学生がファイルに一元化（ポートフォリオ化）することによって、目標到達と自己評価の実現をねらいとした福岡看護学部の試みが報告されました。

具体例として、実習形式の授業で用いられている「学習ノート」が紹介されました。これは実習形式の授業において［一］学生に事前課題を与え学習させる［二］授業での気付き、疑問、質問を記入し、教員へ提出する［三］二日後に教員によるコメント、アドバイスがフィードバックされるというプロセスを経ることで授業の理解度を高めていくという取り組みです。

小田学部長の講演終了後に設けられた質疑・応答では、同様にポートフォリオを用いた授業を行っている先生からの質問、運用事例の報告などが相次ぎました。

閉会に際し、満留副学長は総括として「学生の［一］学習の習慣を形成する［二］学習の意欲、楽しみをかき立たせる［三］好奇心を引き立たせる、このような可能性をポートフォリオに感じました」と結び、参加した教職員に一層の改善を目指すことを促しました。

（福岡広報　川崎修）

ミャンマーから研修生を迎える。

福岡リハビリテーション学部及び九州地区の各臨床医学研究センターでは、国際協力機構（JICA）の「ミャンマーリハビリテーション強化プロジェクト」の一環として、一一月一七日（火）より、ミャンマーの国立リハビリテーション病院をはじめとするミャンマー国内の医療機関より、医師、理学療法士などの医療専門職を招き、短期研修を行いました。

このプロジェクトでは、本学部作業療法学科の奈良進弘教授が昨年より、チーファドバイザーとしてミャンマーに赴き、指導を行っています。

今回の研修は「脳卒中患者のリハビリテーション（急性期から維持期におけるリハビリテーション・サービス）-Rehabilitation Service for Acute to Chronic Phase -」といい、整形外科系の疾患に対するリハビリテーションが中心のミャンマーで、脳卒中などの中枢神経系疾患におけるリハビリテーションを導入してもらうための取り組みです。

研修に参加したのは、Win Nyi Sheinさん（医師）、Dr.Win Zawさん（医師）、Mrs.Wai Wai Nyuntさん（理学療法士）、Ms.Thin Lei Hanさん（理学療法士）、Ms.Than Than Yuさん（理学療法士）の五名。

研修は、高木病院、柳川リハビリテーション病院、みずま高邦会病院、ケアサポートハウス大川など、各関連施設で講義と視察が行われました。内容は保健医療制度論から各施設の特性、実際の治療に関することなど多岐にわたりました。研修生からは熱心に質問する姿が見られました。また帰国後、すぐに活用できそうなノウハウも得られたそうで「帰国したら早速、同僚に伝えて実践したい」という声が聞かれました。

研修生は、帰国後に指導的立場で同国内のリハビリテーションを牽引していく役割を担っており、今後の活躍が期待されます。

（入試広報部　横溝公紀）

トピックス Topics

留学生・市長懇談会

一〇月二九日（木）一八時三〇分から、大田原市内のカシマ・ウエディングリゾートにおいて、毎年恒例の大田原市長と留学生の懇談会が開催された。

大田原市からは千保市長、大島秘書課長、齋藤広報公聴係長が出席、本学の留学生一年生二名、二年生六名と学生課長が参加した。

会食に引き続き懇談が行われ、市長から、留学生諸君は自分が外交官になったつもりで大田原を知り、それぞれの出身国に伝えることで友好関係の架け橋になって貰いたいとの挨拶があった。

留学生からは日頃の配慮に感謝するとともに、市営バスや市営住宅に関する要望が出され、市長からは出来るだけ対処するとの回答をいただいた。

本学の開学以来、大田原市では市内に在住する外国人留学生に対して、市営バスの無料パスを発行するほか、市営住宅への格安料金での入居、一・二年生の間、毎月一万円の奨学金を支給するなど、優遇措置を実施していただいている。

（学生課　高石和秀）

保護者懇談会

保護者懇談会が左記の通り開催された。

・福島地区郡山会場一一月二三日（月・祝）
・関東甲信静岡地区東京会場一一月二九日（日）
・東北地区仙台会場一二月六日（日）
・茨城地区水戸会場十二月二〇日（日）

各地区とも百名を超える保護者の参加があり、四会場合計では五百名近い保護者の方が参加した。

地区別に、北島学長、岩尾副学長、杉原副学長、伊藤常務が出席して挨拶し、郡山会場には、浅賀正典教育後援会副会長も参加されご挨拶をいただいた。

最初に、学生生活を紹介するDVDを上映した後、大学の現況・学生生活について説明を行い、その後学科別に別れて保護者と各学科の教員が懇談し、活発な情報交換が行われた。

各学科に共通するテーマとして、学業・成績、国家試験対策と指導、実習方法や実習地と経費、県別の求人状況や就職活動の方法、学生生活等が挙げられる。

各会場でのアンケートでは「参加してよかった」「また来年も参加したい」との意見が寄せられた。（学生課　栗田淑夫）

同窓会「マロニエ会」幹事会開催

一二月一二日（土）、国際医療福祉大学同窓会「マロニエ会」の平成二一年度幹事会及び懇親会が、那須アスリーナで開催された。

一期生から一一期生までの幹事・副幹事九六名を始めとする、総勢一一四名が参加した。

幹事会では、谷合代表幹事、高木理事長、北島学長の挨拶に続き、平成二一年度同窓会活動報告、支部に関する規約等の説明があった。

挨拶の中で、谷合代表幹事は、日頃の同窓会活動への協力の感謝と、医療福祉学部の一期生卒業から一〇周年を迎える来年、記念行事を企画したいという抱負を述べ、高木理事長からは、同窓会を力強い組織にしようというお話、北島学長からは、卒業生が大学を支え、大学も卒業生を大切にし、発展していく環境を作ろうというお話があった。

続いて開かれた懇親会では、開原大学院長が、ぜひ、大学を生涯教育の拠点としてほしいと話し、続いて二峰副代表幹事の発声で乾杯した。

久しぶりの同期生や教員との再会に会話も弾み、会場は終始和やかな雰囲気に包まれた。今後の同窓会活動に繋がる有意義な会となった。

（同窓会事務局　小原澤浩子）

看護学科「老年看護学」の展望 老年看護学実習にふれあい実習を導入

日本における高齢化は、他の国に類をみない速さで進み、平成二二年には、高齢化率約二三％と推計されている。

本学科では、平成十九年度改変カリキュラムにおいて、老年看護学実習が二単位から四単位に増え、本年度は四週間の実習開始の年になる。老年期にある高齢者の理解を深め、尊厳を保ちながら、その人らしい自立した健やかな生活を整える支援ができることを目指している。しかし、学生の多くは、祖父母と一緒に暮らした経験が少なく、高齢者と何を話したらよいのかコミュニケーションがとれないという課題がある。そこで、実習一週目は、地域で暮らす多くの高齢者との交流を持ち、老年期の理解を深める「ふれあい実習」を行う。大田原市役所のご協力を得て、市内の街角に学生が出向いて、お年寄りに声をかけて、生活史や背景、生き方、考え方などを伺い、その学びを共有するため発表会を行う。実習二週目から四週目は、ふれあい実習での学びを活かして、病院や施設で生活している高齢者を受け持ち、保健・医療・福祉の活動を理解して、看護師の役割を探求する実習を行う。

今後、老年看護の活動の場は病院・施設から地域・在宅へと拡大する。様々な場で高齢者とかかわり、その人にとってのよりよい生活を高齢者と共に考え支援ができるような看護大学生の教育を目指していく。

（看護学科准教授　谷　規久子　老人看護専門看護師）

言語聴覚学科　実習報告会

十一月二十六日、言語聴覚学科の学外実習報告会が行われた。四年次に行われた学外実習を通じて、学生自身が学んだことや来年度実習に望む三年生へ伝えておきたいことなどの報告であった。

四年生においては、学外実習を行う事で知識や技術を深めることができただけでなく、患者様との関わりや実習バイザーからのアドバイスを通じて、言語聴覚士に求められるものは何であるのか、自分自身に今足りないものは何であるのかなど、本質的な問題についても自問自答することができたようであった。三年生においては、来年度の参考にしたいと真剣な眼差しで先輩達の話に耳を傾けており、臨床実習への準備をする上で多くの情報が得られたようであった。

今年度は、関連職種連携実習の学科内報告も行われ、総合的な視点で患者様に向かうことの大切さも感じる報告会となった。

（言語聴覚学科講師　小渕千絵）

視機能療法学科「ロービジョン講習会」開催

去る十一月二十七日、国立障害者リハビリテーションセンターの視能訓練士長である、三輪まり枝先生を講師にお招きし、視機能療法学科主催のロービジョン講習会「ちょっとの工夫でみやすさアップ！視覚補助具の活用法」が、M棟2階実習室で開催された。

当日は、本学教員をはじめ、大田原市福祉課職員、訪問看護ステーションケアマネジャー、また一般の方も参加され、二十一名の参加があった。講習会は最初に、視野狭窄や白内障のシミュレーションゴーグルを装用し、視覚障害者が実際にどのように見えているのかを、じゃんけんや新聞紙のボールゲームなどをしながら体験した。その後、視覚補助具について、光学の基礎的な知識を交えながら、わかりやすいお話があった。

参加者は、実際にさまざまな視覚補助具を手にし、使用法やアドバイスの仕方などを学んだ。

一時間半の講習会は、視覚補助具について楽しみながら学ぶことができた。次年度も引き続き、ロービジョンに関する講習会を開催する予定なので、今後も皆様の積極的なご参加をお願いしたい。

（視機能療法学科　三柴恵美子）

戦略的大学連携支援プログラム 補助金による「電子カルテ実習室」の開設

本学では平成二一年度、文部科学省の「大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム」に応募し、〝コメディカル養成のための教育用電子カルテシステムおよびデータベースの構築と実践〟が採択されました。本学の他、六大学が協力をして将来の医療従事者に、電子カルテを用いたIT教育法と教材を開発します。このプログラムは、電子カルテを持たない大学でも、仮想私的ネットワークを介して他大学の電子カルテを使用でき、一大学では作成が困難な模擬患者診療記録を共同開発し授業に使用できる、二三年度末まで続くプロジェクトです（http://ehr-renkei.iuhw.ac.jp）

本学では情報教育センターを窓口として、各学科の委員や情報システム室のご協力で電子カルテ実習室の開設、模擬患者診療記録の作成を行いました。また、これまでの経験を基に電子カルテ実習を開始し、一二月二一日には六大学の方に見ていただく電子カルテ実習見学会を行います。電子カルテ実習室は五〇台の電子カルテ端末、教師画面配信システム、ビデオ録画システムが完備されています。

第一三回学長杯スピーチコンテスト

一二月九日、大田原キャンパスで「第一三回学長杯スピーチコンテスト」が開催された。今回のテーマは〝Changes in Our Minds, Changes in Our Lives〟。発表希望者が予想を大きく上回り、本コンテスト開催以来初の予選審査が行われた。予選を通過した一五名は以下の通りである。（発表順）

【スピーチ部門】

秋田裕介（放射線・情報科学科二年）
常盤正浩（医療福祉学科二年）
桑原亮太（医療福祉・マネジメント学科一年）
仙場麻衣（言語聴覚学科二年）
田中教義（言語聴覚学科一年）
椎名宣光（医療福祉・マネジメント学科一年）
上杉有香（言語聴覚学科一年）
ハンニトン（放射線・情報科学科一年）
佐藤愛里（薬学科一年）

【暗誦部門】

鶴見莉花（薬学科一年）
多和田真希（理学療法学科一年）
大岩貴代（医療福祉・マネジメント学科一年）
丸谷史乃（言語聴覚学科一年）
大串ことみ（言語聴覚学科三年）
加納愛美（薬学科三年）

スピーチ部門は、上杉有香さん（What Made I am）が、言語聴覚士を志すきっかけとその意義を流暢な英語で表現して優勝した。

二位のハンニトンさん（Bridging the Gulf）は、放射線技師として日本とミャンマーで活躍したいという将来の夢を語った。三位の田中教義さん（Sorry, Mom. Thanks, Mom.）は、亡くなったお母さんへの思いを表現した。

暗誦部門は、多和田真希さん（Is There a Santa Claus?）が、サンタクロースは存在するかしないかを表現力豊かに説き、会場を暖かい雰囲気で包んで優勝した。

二位の鶴見莉花さん（Change Has Come to America）は、オバマ大統領の就任演説を力強く表現した。三位の大串ことみさん（The Story of My Life）は、ヘレンケラーの少女時代の苦悩と言葉との出会いによる変化を感情豊かに表現した。

さらに今年から、「プレゼンテーション部門」が追加され、大会を大いに盛り上げた。この部門では、パワーポイントなどの視覚的な資料とともにプレゼンテーションを行う。医療福祉学科四年の藤井千裕さんは、オーストラリアでの海外研修の経験を写真と共に紹介した。また、薬学科一年の小笠原夕希子さんと看護学科一年の半田理瑛さんは、日本に古くから伝わるドクダミ、センブリ、ゲンノショウコの薬草について、わかりやすく、かつアカデミックに紹介した。今年試験的に導入されたため、審査の対象とはなって、各学科の委員や情報システム室のご協力で電子カルテ実習室の開設、模擬患者診療記録の作成を行いました。また、これまでの経験を基に電子カルテ実習を開始し、一二月二一日には六大学の方に見ていただく電子カルテ実習見学会を行います。電子カルテ実習室は五〇台の電子カルテ端末、教師画面配信システム、ビデオ録画システムが完備されています。

私のおすすめ本 第14回

「娘よ、ゆっくり大きくなりなさい　―ミトコンドリア病の子と生きる」
堀切和雅　著　集英社新書　六六〇円

小田原保健医療学部　作業療法学科　講師　阿部　浩美

私は大学の教員になる前、十数年間、発達障がいを持つ子どもたちの療育機関で作業療法士として働いていた。その間、多くの子どもたちとそのご家族に出会った。そこには様々なドラマがあった。第一子が障がいを持って生まれ途方にくれるご両親、第二子も障がいを持って生まれると知った上で子どもを産み育てるたくましいお母さん、これまで原因が分からず対応に困っていた子どもに診断がつきホッとするご両親、子どもの小さな一歩に喜びを感じていく家族。泣いたり笑ったり、悩んだり喜んだりしながら、子どもと共に家族も、そして私自身も成長させてもらった。

この本の主人公「響ちゃん」を私は短期間担当させていただいたことがあった。著者のお父様からこの本をプレゼントしていただき読んだとき、この家族の笑顔の裏にはこんなにも多くの苦難があったんだと感慨を深くした。

響ちゃん出生、ミトコンドリア病という難病の宣告、悲しみから少しずつ外へ乗り出していった過程、日々成長し愛くるしさを増していく響ちゃんの姿、喜びの背後に常に将来の不安を抱かざるを得ないご両親の心情がとても素直に描かれている。

ことばの一つひとつ、綴られる文章はとても力強く、説得力があり、心に重く深く響く。それは何より、ここに書かれていることが事実であり現実であるからこそだと思う。

特に印象に残っているのは、「二重の喪失」と「響の人生の意味」である。障がい児が生まれたときの「健常な子」のイメージとの訣れ、そして「実際のわが子」の喪失（の可能性）という二重の喪失の思いを抱えながら、響ちゃんの生について自問自答されている。―「響がいる人生が、僕らの人生なのだ」「『人間の原初状態としての楽しい生』を生きるのが彼女のタスクであり、楽しいと感じることそのものが、生きる意味であり、僕らがそれに浴する。」―とても勇気付けられる言葉である。

今回の執筆にあたり、久しぶりに堀切さんに連絡をとってみた。響ちゃんは現在小学二年生になり、元気に学校に通っているそうである。学校ではとても人気者らしい。おちゃめな響ちゃんの姿が目に浮かぶ。

これからも元気に、九歳、十歳・・・と誕生日を迎えていって欲しいと切に願う。

医療関係の道に進む学生さん達にぜひ読んでいただきたい一冊である。

らなかったが、いずれの発表も興味深く聴衆を惹きつけた。

学長をはじめとする審査員の先生方からは、その質の高い発表に惜しみない賞賛の言葉が贈られた。会場は立ち見が出るほどの熱気で、入賞の如何に関わらず、参加者全員の長期にわたる努力と訓練は、それぞれの発表に反映されていた。

Changes in Our Minds,
Changes in Our Lives…

コンテストの発表者、そして発表を聞いた全ての人々にとって新たな変化を生み出すきっかけになることを願ってやまない。

（総合教育センター・語学教育部）

日韓創薬育薬医療ネットワークのあり方を検討する

―韓国研修を終えて―

日時　二〇〇九年九月三日～五日
訪問施設　ヨンセイ大学ほか
参加者　医療福祉経営専攻　創薬育薬医療分野大学院生、研究生及び修了生十二名

近年、国策として臨床試験を推進するアジア諸国が医薬品開発において、高く評価されている。日本においても様々な取り組みがなされているが、その差は広がる気配をみせている。そこでアジアにおいて、順調な成長を続けている韓国の臨床試験の現状を知り、今後、アジアでの臨床試験の連携を目指して、臨床試験センターや関連施設の見学研修を行った。

【ヨンセイ大学セブランス病院臨床試験センター（Clinical Trial Center/CTC）訪問】

Min Soo Park教授より、CTCにおける臨床試験の実施体制及び実施状況に関する紹介を受けた後、施設見学を行った。その後Min教授、Clinical research Coordinator（臨床研究コーディネーター、以下CRC）、CTC専属スタッフ同席のもと、国際医療福祉大学院側から、日本の臨床試験の現状に関する紹介を行い、臨床試験の実施環境における日韓間の違いに関して意見交換を行った。

・CRCをはじめとする臨床試験専門スタッフの教育体制について
・臨床試験を行う医師やスタッフのモチベーションの違いについて
・国際共同治験（Multinational Trial）への対応について
・治験を実施する上でのインフラ及び法の整備状況について

今回の研修では、韓国の臨床試験実施施設の充実ぶりに参加者一同驚かされ、また、創薬育薬医療に関わるスタッフのモチベーションの高さに、日本との環境の違いを目の当たりにした。一方、日本のCRCの認定制度やワークショップを取り入れた継続研修等と同様な取り組みは韓国では行われておらず、参考にしていきたいと言われ、今後のよき協力関係を築いていくきっかけとなると思われた。アジアの創薬育薬医療における日本と韓国のそれぞれの役割や連携について多くの意見交換が出来、今後の大学院での研究ならびに日常業務に生かすことのできる充実した研修であった。

最後に、本研修は大学院生が中心になり行ったもので、この企画をご了解・ご支援頂いた分野長の中野教授、及び見学研修を快く受け入れて頂いたヨンセイ大学Min教授に深謝致します。

（創薬育薬医療分野博士課程三年　福島　芳子）

私の主張　第14回「まったくけしからん」と思ってはいけない

保健医療学部　理学療法学科　講師　下井俊典

栃木に来て十一年目になりますが、いまだに驚かされることが少なくありません。

「しもつかれ」という食べ物には驚愕しましたが、直進する車より右折の車両の方が優先するというルールには、驚きを超えた感情があります。

道路交通法がいつの間にか改正されているのかもしれません。

と、思っていたある日、大学に出勤して、教職員用の駐車場に車を停めようとして、写真のような目を疑うような光景がありました。

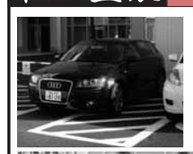
どう見ても、車を停める線を跨いでいたり、線の外に車が停まっている気がします。運転している人には、地面の線が見えないのでしょうか。

ちなみに私は、「制限速度」という漢字、熟語が見づらくなったり、見えなくなるときがあります。

でも、こういうふうに停車する人には、何かの理由があるはずです。もしかしたら、線を跨いでいる人は、半分だけ身障者なのかもしれません。もしかしたら、線の外に停めている人は、我々には見えない線の中に、ちゃんと停めているのかもしれません。

ですから、こうした駐車を見ても、「しょうがないなぁ」とか、「まったくけしからん」と思ってはいけないということを「私の主張」としたいと思います。

そういうときは、「左半身がお悪いのに、運転大変ですね」とか「見えないものが見えるなんて、特殊な能力をお持ちですね。地球が危機の時は是非救ってください」と言ってあげなければいけません。



注：写真はいずれも撮影用に再現して駐車したものです。

●新春特別企画

我がふるさとのお正月

今号では新春特別企画として、各地から集まる学生が、「ふるさとのお正月」を紹介します。

■料理編

北海道「くじら汁」

（放射線・情報科学科一年　小濱達也）

函館市やその周辺の道南地方では、昔から正月に「くじら汁」を食べる。江戸時代、ニシン漁が盛んだった道南地方では、「クジラがくるとニシンが岸に寄る」と言われ、「くじら汁」はニシンの大漁への願いを込めて作られたものだ。

クジラの脂身の他にジャガイモなどを入れるが、材料や味付けはそれぞれの家で異なる。

山形県「雑煮」

（看護学科一年　横山友美・今井翔子）

庄内地方のお雑煮は醤油味で、こんにゃく・ごぼう・ねぎ・生揚げ・芋がらを入れ、焼いた丸餅を使い、岩のりをかける。おせち料理には「こげつ」（糸こんにゃくと人参の千切りに、かん鱈の卵をまぜて炒め、醤油で味付けしたもの）、「はりはり大根」（干した大根、人参、数の子を、みりんと醤油とかつおだしに漬けこんだもの）、「ぼう鱈の煮つけ」（醤油と砂糖で鱈を煮たもの）などがある。

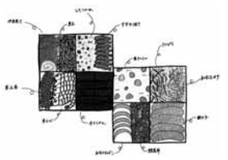
宮城県「雑煮・煮つけ」

（薬学科三年　日下春樹）

宮城県仙台市のお雑煮は醤油味で、短冊切りの大根と人参、高野豆腐、かまぼこ、椎茸、せり、ハゼ、イクラが入る。餅は焼いた角餅を使う。出汁は松島湾でとれるハゼの焼き干しでとる。

また、宮城県の正月には「ナメタガレイ」の煮つけが欠かせず、特に子持ちのナメタガレイは縁起が良く、めでたいものとされている。

栃木県「おせち・お雑煮」



（医療経営管理学科三年　髙橋怜奈・飛田美香絵）

地元・栃木県からは、宇都宮のおせち・お雑煮を紹介。髙橋家のおせち料理の特徴は、何といっても「しもつかれ」。栃木の郷土料理としても有名である。そして飛田家のお雑煮は、カツオだしと醤油をベースとした具だくさんな点が魅力である。

今は食べるのが専門だが、将来は家族のために祖母、母と代々続く味を引き継いだおいしいお正月料理を作れるようになりたい。

■行事編

岩手県「みずき団子」

（言語聴覚学科三年　武蔵南美）

「みずき団子」は小正月の行事で、ぐんぐん伸びるミズキの木の枝に食紅で色づけされた色とりどりの団子を飾って、五穀豊穣を祈る。一週間ほど飾られ乾燥した団子は、枝からはずして油で揚げ、あられにして食べる。ミズキの木が色とりどりの団子の花をひっそりと咲かせる中、家族の健康を祈りながら新年を迎える。

福島県「夫婦獅子舞祭」

（視機能療法学科三年　門馬愛美）

福島県田村市にある大鏑矢神社は、普段は四方を山に囲まれた自然豊かで静かな場所だが、お正月には町内外の参拝者で賑わう。伝統行事の「夫婦獅子舞祭」は、夫婦獅子が町内の集会所や新築住宅、店舗などを舞って巡り、安全祈願や五穀豊穣、商売繁盛などを祈願する。

千葉県「初日の出」

（視機能療法学科三年　永田暁子）

千葉県の銚子は日本で一番早く初日の出が見られる場所として知られている。

実家の近くに犬吠岬という海岸があり、一月一日の日の出前は大勢の観光客で賑わい、ちょっとしたお祭りのようになるのが毎年の楽しみである。

〈学生編集スタッフ募集〉 ＩＵＨＷでは学生編集スタッフを募集中！取材・編集・カメラ撮影などに興味のある方は、大田原キャンパス総務課窓口まで！（担当：高橋）

スカパー! Health & Welfare 774 「医療福祉チャンネル774」おすすめの番組

医療福祉チャンネル774では、スカパー！の774チャンネルで、医療・福祉・健康・介護に関する教育、教養、情報番組を放送！

国際医療福祉大学アワー

大学・大学院などの情報が満載

入学式や卒業式・運動会・大学祭などの行事、臨床実習や海外研修・国際活動、そしてクラブやサークルの紹介、先生方へのインタビューなど、大学・大学院・ＩＨＷグループのさまざまな情報をお届けします。学生のみなさまはもちろん、ご家族の方もぜひご覧ください。

2010年新春号「高木邦格理事長と黒岩祐治大学院教授の新春対談」

●この番組は放送終了後も、インターネットでご覧いただけます。
http://www.iuhw.ac.jp/movie.html

黒岩祐治のメディカルリポート　第68回

インドネシア人ナースたちは、今

日本で看護師になることを夢見て

日本・インドネシア経済連携協定(EPA)により2008年8月、インドネシアの看護師候補者104名が来日しました。彼らは3年以内に日本の看護師国家試験に合格しなければなりません。また、資格取得までは看護助手の仕事しかできないこと、言葉の壁、文化や看護の状況の違いなどにも悩まされました。番組では、彼らの苦悩の一年を追いました。

希望を胸に来日したヘルファンドリさん（左）とデウィさん

介護福祉士受験講座2010

ニーズが高まる介護のプロをめざす

介護福祉士国家試験には、介護保険制度改革、高齢者医療制度改革など、様々な社会潮流の変化が反映されます。ベテラン講師が過去21回の出題傾向を徹底的に分析、試験によく出る項目に特化して解説します。また、実技試験の過去問題が全て見られます。

実技試験の模範演技と詳しい解説

福祉住環境コーディネーター２級受験講座

住みやすい住環境を提案するアドバイザー

福祉住環境コーディネーターは、医療・福祉・建築について幅広い知識を身につけ、バリアフリー住宅への建て替えやリフォームのコーディネートを提示します。また、福祉用具や諸施策情報についてアドバイスするなど、幅広いニーズのある資格です。

秋山純和氏（本学教授）

●医療福祉チャンネル774を見るには

スカパー！の774チャンネルでご視聴いただけます。
○視聴料・・・月額2,100円（他、スカパー！加入料2,940円（初回のみ）・スカパー！月額基本料410円がかかります）
法人契約・・・5,250円
○IUHW学生、マロニエ会会員、教育後援会会員の皆様は、特別視聴の制度があります。下記までお問い合わせください。

●視聴に関するお問い合わせは

フリーダイヤル 0120-870-774（株）医療福祉総合研究所　お客さま係
Eメール　info@iryoufukushi.com　HP　www.iryoufukushi.com/
〒107-0062　東京都港区南青山1-3-3　青山1丁目タワー　４階

◆774視聴者特典　無料配信中！

医療福祉専門チャンネル動画配信サイト
医療福祉eチャンネル
www.ch774.com/

広報誌 IUHW 80号

発行：学校法人 国際医療福祉大学
〔大田原キャンパス〕広報委員会
栃木県大田原市北金丸2600-1　☎0287-24-3000
〔小田原キャンパス〕
神奈川県小田原市城山1-2-25　☎0465-21-6500
〔福岡天神キャンパス〕
福岡県福岡市中央区長浜1-3-1　☎092-739-4321
〔大川キャンパス〕
福岡県大川市榎津137-1　☎0944-89-2000
〔東京事務所〕広報室
東京都港区南青山1-24-1　☎03-5775-2505

デザイン：iDept.　編集：東京事務所広報室

©国際医療福祉大学　2010 Printed in Japan　禁無断転載・複写

医療福祉の多彩なエキスパートを育てる。
国際医療福祉大学

お知らせ

IUHW Hot News

学位記授与式、入学式のご案内

平成21年度　学部学位記授与式ならびに大学院学位記授与式の日程

●大田原キャンパス
日　時：平成22年3月16日(火)　10:20～／会　場：那須アスリーナ1階
●小田原キャンパス
日　時：平成22年3月18日(木)　10:20～／会　場：６Ｆ体育館
●大川キャンパス
日　時：平成22年3月14日(日)　11:00～／会　場：講堂

平成22年度　学部入学式並びに大学院入学式の日程

●大田原キャンパス
日　時：平成22年4月3日(土)　10:20～／会　場：那須アスリーナ1階
●小田原キャンパス
日　時：平成22年4月4日(日)　10:40～／会　場：６Ｆ体育館
●大川・天神キャンパス
日　時：平成22年4月5日(月)　10:20～／会　場：福岡市民会館（予定）